写真１　備前焼の変遷　※ 天正 18 年銘壺は岡山後楽園蔵、他は岡山県立博物館蔵

写真２　備前焼 徳利　伝伊部南大窯跡出土（岡山県立博物館蔵）

写真３　備前焼 緋襷鶴首花生（根津美術館蔵）

写真４　備前焼 徳利（岡山県立博物館蔵）

写真６　黒織部茶碗（根津美術館蔵）

写真５　黒織部茶碗陶片（岡山県立博物館蔵）

写真７　備前焼 徳利の変遷試案　※ すべて岡山県立博物館蔵

備前焼の変遷と窯跡採集資料の紹介
―休館中に行った整理作業を通じて―

重根弘和

はじめに

県政百年記念事業の一環として、岡山県立博物館は岡山後楽園の正門前に建設された。開館日の昭和四六年（一九七一）八月二九日は、廃藩置県が宣言された明治四年（一八七一）七月一四日（旧暦）からちょうど一〇〇年にあたる。

築後五〇年が近づき建物の老朽化が目立つ博物館は、令和二年（二〇二〇）四月一日から休館し、空調設備等の更新や耐震補強のため改修工事を行った。令和五年（二〇二三）一月七日から、改修部分が少なかった一階展示室のみ先行して展示を再開し、同年四月一日からは全面的に再開館となる。

収蔵庫も改修の対象となり、所蔵品は館内外の複数箇所に分けて保管した。また、作品の調査や撮影などを行う作業場所にも工事は及んだ。工事の影響により、作品の取り出しや作業場所の確保が難しい時期もあったが、三年近くにも及ぶ休館期間を利用し、館蔵品と寄託品の再整理、そして再調査を進めた。また、その成果に基づき、展示室で配布する資料の案を作成した。

ここでは、整理作業を行う中で得た、陶磁器分野における調査成果を紹介する。

一　陶磁器分野の館蔵品リスト

当館は収蔵品を一括して、データベースソフトで管理してきた。休館するまでにそのデータベースへ登録されていた、陶磁器分野の館蔵品数は四六四件である。

今回の整理作業では、作品の所在を確認しながら、収蔵位置を示す図を作成した。同時に、破片資料以外は再撮影と計測を行い、作品の画像と計測値が一覧できるリストを作成した。画像データは器種などで区別せず、まとめてフォルダ内に保管する。必要なときは、リストに示したファイル名に基づき、検索が可能である。寄託品についても同様の作業を進めた。

なお、改修工事により収蔵庫内の棚は改められ、配置も変更された。そのため位置図は、作品を収蔵庫内に戻す際に作り直した。

今回の整理作業を通じて作成したリストを、来館者向けに編集した資料が写真8である。この資料は、当館で展示する館蔵品の備前焼をほぼ網羅する。

写真は種別ごとにまとめて時代順に配置し、資料を広げて見ると、おおまかに備前焼の変遷が捉えられるように意識して作成した。費用が確保できたときに印刷を行い、展示室で配布する予定である。

写真８　配付資料案　※ 190 × 900mm　両面カラー　ジャバラ８面

写真９　備前焼 花瓶の変遷（右列は壺）

備前焼の花瓶は中国の磁器か銅器を模したとされるが、一六世紀代のものは、頸部より上を除いて胴部のみを見ると、同時期に作られた壺と類似し、形の変遷も共通する（参考：右列）。

ただし元和期には、中国の磁器をより忠実に模倣するようになり、備前焼の壺との類似性は失われる。元和期以後の備前焼を見ると、いわゆる「写し」に対する意識が変わるのか、模倣の忠実度が増す傾向にある。

※永正９年銘・永禄12年銘（静円寺光明院蔵）、元和２年銘・天正18年銘（岡山後楽園蔵）、他は岡山県立博物館蔵。

永正９年銘、永禄12年銘、天正18年銘、慶長15年銘は岡山県指定重要文化財。

二　備前焼の変遷

i．変遷の提示

作成した館蔵品リストの中から備前焼の壺、甕、擂鉢を抽出し、中世から近世にかけて備前焼の形がどのように変わっていくか示したのが写真1である。時代は上が古く、下が新しい。

上から下に向かって順に見ると、様々な部分に変化がある。その中で最も変化が捉えやすいのは、口縁部と呼ばれる上端部分である。これまでの研究でも、備前焼が作られた時代は、口縁部の形に注目するとわかりやすいと指摘されてきた。写真1でも、おもに口縁部の変化に注目し、それぞれの特徴を写真横に記して変遷を示した。

ii．変遷の概要（写真1）

擂鉢は一四世紀になると厚くなり、口縁部上端にできた平坦面の幅も広くなる。平坦面は一四、五世紀を通じて外側が下がり、内側が上を向く。そのため、口縁部が上に向かって拡張したような形になる。さらに新しくなると拡張部分が上方に伸び、外面に条線が廻る。一六世紀後半にはその部分を厚くし、上端の内側に段を付ける。

壺と甕の口縁部は、一五世紀前半まではほぼ同じ変遷をたどる。一三世紀までは端部を外側へ反らせるだけだが、次第にその範囲は広がり、下に向かって折り返した形になる。一四世紀には折り返した部分が圧着され、特徴的な玉縁ができあがる。中世から近世にかけて、備前に限らず国内各地で壺と甕が作られるが、表面の質感や色調に加えて口縁部の形を見ると、おおよその産地は識別できる。

甕は一四、五世紀を通じて折り返す範囲を広げ、玉縁を大きくしていく。そのため口縁部の断面は、一四世紀前半までは円形であるが、それ以後は長楕円形となる。一六世紀に入る頃には接着部分が強く押さえられ、玉縁外側の下半にくぼんだ線が廻る。一六世紀以降、さらに玉縁が大きくなると線を上に増やし、一六世紀後半からは三条の線を廻らす例が多数となる。

壺は一五世紀後半から玉縁の上下幅を狭め、一六世紀に入る頃には断面が円形というよりは三角形に近くなり、口縁部の外側に稜ができる。端部を外側に折り曲げず、厚みを増すだけで玉縁状に見せるものもある。一六世紀後半からは上から押さえて外側に突出させた形になり、一七世紀に入ると突出させた部分の上端を平らにする。

なお、壺、甕ともに、一六世紀末頃から胴部の張りが小さくなり、寸胴型に近づく傾向にある。一六世紀代には備前でも花瓶を作るが、この胴部は同時代の壺と形状が類似する。そして、一六世紀後半以降、胴部の張りが小さくなる（写真9）。壺、甕、花瓶といった異なる器種において、同じ傾向が認められる。

備前焼の表面は、一三世紀までは灰色が中心だが、一四世紀前半から赤みを帯びたものが増え、一五世紀以降は赤褐色が中心になる。現在は、備前焼と聞くと茶色のイメージが強いようだが、そうした発色が増えるのは一四、五世紀からである。ただし、「茶色」とひとくくりにして呼ばれる色であっても、時代によって赤みの強さや色の明るさが異なり、それに加えて光沢の有無や調子、そして表面の質感にも違いがある。

大量に生産された壺、甕、擂鉢は、作られた時期により、表面の色や質感に一定の傾向が認められる。もちろん個体差もあり、一点のみを見て判断するのは危険であるが、その傾向を参照すると、壺、甕、擂鉢以外の備前焼（経筒、瓦、茶道具など）についても、大まかな年代推測が可能となる。例えば、「桃山の名品」と伝わる茶道具の花入や水指を見ると、慶長一二年（一六〇七）銘や慶長一八年（一六一三）銘の甕と、表面の質感や色調が類似するものがある。

iii. 提示した変遷の問題点

写真1は館蔵品の中から各時代の特徴がよく表れた作品を抽出し、写真を縦に並べ、そこに岡山後楽園からの寄託品を一点加えて作成した。作品の抽出にあたっては、全体の形がわかるものに限定した。そのため掲載した作品の数は、時期によって多少がある。

例えば、一三世紀以前の作品は少ない。そもそも備前焼の壺、甕、擂鉢が完全な形で伝わる例は限られる。輸送する船が沈没して海底に残された、火葬骨や銭を入れて埋めたといった場合を除くと、壊れるまで使用するのが一般的である。一四、五世紀になると備前焼は全国に流通し、海底や集団墓などで完形品が見つかる例も増えるが、一三世紀以前は遠方まで運ばれた例は少なく、窯跡群で確認できる陶片の量も一四、五世紀ほど多くはない。一三世紀の窯跡は複数知られるが、窯跡採集品で全体の姿がわかる資料はまずない。基本的には使用に耐えない、もしくは商品になり得ないと判断されたものしか残されておらず、どうしても一三世紀以前の作品は手薄になる。

擂鉢については、用途から考えても、完全な形のまま伝わることは少なかったと想像できる。全国各地の中世遺跡では、内面が摩滅し、破片となった擂鉢が大量に確認されている。ここで紹介した擂鉢は、いずれも海底から引き揚げられた「海揚がり」と呼ばれるもので、使った痕跡はない。「海揚がり」は、作られた当時の姿を伝えると同時に、備前焼の流通や制作年代を考えるときの重要な参考資料となり、研究の進展に大きな役割を果たしてきた。

集団墓において、備前焼の壺を火葬骨の埋納容器に使用する例は、一三世紀代から確認できる。墓地に埋納された壺は割れずに伝わる例も多く、壺については擂鉢や甕よりも均等に作品が配置できた。しかし集団墓の発掘調査成果を見ると、壺にはかなりの形態差がある。写真1ではそうした例は網羅せず、各時代の特徴が捉えやすい作品のみを抽出して紹介した。

甕は高さが一mを超え、重さが一〇〇kgに及ぶものが一六世紀後半から増える。大きな甕は、壺や擂鉢と比べると移動は難しく、土中に埋めるなどして使用した。また、肩部に「あつらへ」と刻む例もあり、特別な注文品であった可能性がある。そのためか、大形品に保存状態がよいものが多い。また、肩部や底面に年銘を刻む例も多く、一六世紀後半から一七世紀前半にかけて、形や作り方の変遷が詳細に追える。ただし、それよりも古い一六世紀前半の甕は当館には収蔵されておらず、一四、五世紀代とした作品も復元品である。大形品や年銘を刻む作品以外は、甕も擂鉢と同じように割れるまで使用したか、廃棄するときに割った可能性がある。

国内各地の著名な窯業地は、県立の陶芸美術館などを設立するが、そうした施設がない岡山県では、県立博物館がその役割も担う。博物館は備前焼を主要な展示品の一つと位置づけ、常に展示場所を確保し、歴史や特徴などを紹介する作品を幅広く収集してきた。写真1はその成果に基づく。ただし、先にも述べたとおり、備前焼の歴史を振り返り、どのように使われてきたかを考えると、形がわかる良好な作品の入手が難しい時期もある。また、現代の備前焼研究では、一七世紀前半からは茶道具や細工物が注目されるためか、それ以後に作られた壺、甕、擂鉢はほとんど収蔵されていない。

あくまでも写真1は、壺、甕、擂鉢の変遷を館蔵品に基づきながら大まかに示したものである。

ただし、備前焼の変遷について概略を知る参考資料にはなると考え、備前焼関連年表を裏面に印刷した上で、写真8と同じように展示室にて配付する予定である。なお文末には、備前焼の変遷を知る関連資料として、古墳時代から江戸時代の窯跡分布図を加え、時代によって窯跡が集中する地点が変化する様子を示した。(図1～6)。

三　窯跡採集資料の紹介

i．伊部南大窯跡で採集した徳利

写真2は伊部南大窯跡で採集したと伝わる寄贈品である。一部破片が失われて欠損部分もあるが、ほぼ全体の形がわかる。備前焼の徳利は胴部や頸部の形状によって分類され、本作のようにやや肩部を張らせて胴部を縦に長くした形状は「棗形」と呼ばれてきた。高さが三〇・五㎝で、胴径が二三・六㎝である。開いた口縁端部の外側に面を作り、その部分から肩部にかけて白色になった筋が張り付く。これは窯詰め時に巻いたワラが燃焼した痕である。胴部は厚さが一㎝程度で、胎土中に含まれていた気泡が膨らみ、「ブクが吹いた」と言われるような状態になった部分が数箇所に認められる。表面や割れた断面を見ると、黒褐色の粒が目立つ。

これと類似した作品が所蔵品にある（写真4）。胴部の表面全体が黄色みがかった白色に発色し、口縁部は深紅になる。そして、口縁部と同じ色の線が正面右肩から左下に向かって二条ほど走る。こうした発色は「ヒダスキ」と呼ばれる。

写真2は表面全体が褐色に包まれるため分かりづらいが、よく見るとヒダスキが認められる。白色になった筋の周辺をはじめ、口縁部から胴部にかけて赤色の筋が発色する。おそらく、ヒダスキの発色を狙って窯詰めされた。胴部は写真4のような白色ではないが、同時期の備前焼と比べると、褐色の発色は淡い。急激な温度変化があったのか、焼成の途中で破損し、廃棄されたのだろう。

写真4は、ヒダスキの発色が特に鮮やかな事例として知られてきた。高さ三〇・六㎝、胴径二二・七㎝を測り、写真2と大きさも近いが、口縁部の形態は異なる。本作のほうが高く立ち上がり、内面に屈曲部を作る。胴部外面には、横方向に回転させながら撫でた痕がある。表面は釉薬を掛けない備前焼特有の質感を残しながらも非常に滑らかで、さらりとした手触りである。それに対して写真2は、表面に同様のナデ痕を残すが、手に取るとザラつきを強く感じる。

備前焼の徳利は一六世紀前半には作られていたが（乗岡二〇一七）、生産が本格化するのは一六世紀後半である。一六世紀後半から一七世紀初頭に位置づけられる徳利の多くは、ロクロ成形後、ロクロ目を消すかのように、静止した状態で斜め方向に削る。それが一七世紀前半以降になると、ロクロ成形時に付いた横方向の痕をそのまま残す例が増える。ここで紹介した二つの徳利は、ロクロ成形後に削りつつも、回転させながら横方向に撫でた痕を残す。一七世紀初頭よりやや降る時期に制作された可能性が高い。

窯跡の発掘調査成果を見ると、棗形のような肩部から胴部が張った形状の徳利は、伊部南大窯跡中央窯跡（備前市教育委員会二〇〇八）や伊部南大窯跡周辺窯跡群西2号窯跡（備前市教育委員会二〇〇三）で確認された。それよりも古い段階に位置づけられる伊部南大窯跡周辺窯跡群東3号窯跡（備前市教育委員会二〇〇三）では、多数の徳利が見つかりながらも、棗形は報告されておらず、ここでの推測はその成果とも矛盾しない。

発掘調査成果を踏まえた上で想定した、徳利の変遷試案が写真7である。変遷を想定するにあたり、おもに注目したのは口縁部上端の外側に作る面である。ただし、すべての徳利がそうした面を作るわけではない。小形品をはじめとする頸部が細い徳利は、口縁部をゆるく逆「ハ」字状に開く程度に留めて、端部を丸く収める例が多い。口縁部に面を作らない事例は、時期を問わず存在した。

ところで、写真1で紹介した紀年銘を刻む甕の胴部外面を見ると、元亀二年（一五七一）銘の表面には砂粒を引きずった痕が多数あり、板状工具で撫でた痕をそのまま残す。文禄三年（一五九四）銘と慶長一二年（一六〇七）銘は、手の届く範囲で向きを変えながら、布状のもので撫でた痕を残す。使用した工具は異なるかもしれないが、最終的な仕上げを静止した状態で細かく向きを変えながら行う点は共通する。それに対して、慶長一八年（一六一三）銘と元和五年（一六一九）銘は、回転しながら横方向へと、ひとつながりに撫でた痕を残す。表面の仕上げ方に対する意識の変遷は、先ほど紹介した徳利と共通する。現状の調査成果を見る限り、変化する時期もほぼ一致する。提示した作品数が少ない上に、他の容器でも同じ傾向が認められるか未確認だが、表面の仕上げに対する意識の変化が、備前焼の制作時期を知る手がかりとなる可能性がある。

写真2は、底面にヘラ状工具で「九」と描く。伝世品にこれと共通した記号を刻む事例がある。根津美術館（東京）が所蔵する備前焼の緋襷鶴首花生である（写真3）。ヒダスキの発色が鮮やかな事例として紹介されてきた優品である。この作品は高さ二九・二㎝、胴径二一・八㎝を測り、「花生」と伝わるが、形状は徳利である。写真4も収納する桐箱に付けた木札に「花生」とあり、大形の徳利には花生として伝世する例がいくつか知られる。

写真3は長く伸びた頸部が傾き、下膨れ状に丸く膨らんだ胴部の外面には、回転を利用して横方向へ撫でた痕がある。底面に描かれた「九」の記号は、写真2のものとよく似ている。なお、写真2の頸部が写真3と同じように傾くが、これは焼成時の偶然によるものか、意図したものかは判断が難しい。

備前焼に記号を刻む事例が増えるのは、一六世紀後半からである。このような記号は「窯印」と呼ばれ、作者か注文者を示すともいわれてきたが、現状では窯印が何を示すかはわかっていない。その意味を考える上でも、写真2と写真3は貴重な事例といえる。

写真2と形や大きさが類似する写真4であるが、底面の記号は異なり、「上」と刻む。

ii. 美濃焼　黒織部茶碗の陶片

当館は備前焼だけではなく、丹波、信楽、越前、常滑、美濃といった窯業地の陶片も収蔵する。その中に、「本屋敷」と注記した黒織部茶碗の陶片があった（写真5）。おそらく岐阜県土岐市の元屋敷陶器窯跡で採集されたもので、高さの低い、「沓形」と呼ばれる茶碗の破片である。

元屋敷陶器窯跡には複数の窯跡があるが、発掘調査成果によると、黒織部茶碗は連房式登窯である元屋敷窯で焼成したとされる（土岐市教育委員会・土岐市埋蔵文化財センター二〇〇二）。この陶片も元屋敷窯に窯詰めしたものであった可能性が高い。

写真5は外面のほぼ全面に文様を描き、向かって右上に黒釉が掛かる。白濁した釉薬で外面全体を覆うが、黒釉の縁には掛け残しがある。白濁釉、黒釉ともに光沢はなく、カサついた質感である。黒釉の発色は不完全で浅く感じられ、淡い黒褐色になる。同様の釉薬が内面にも掛かる。断面には、ごく微細な気泡を多く含んだような、やや脆い印象を受ける白色の素地がのぞく。

黒織部茶碗は黒釉を掛け外して、窓とも呼ばれる空白部分を胴部に作り、そこに文様を描く例が多い。この破片は、文様を描いた胴から腰にかけての部分にあたる。文様の上半には、横線をほぼ平行になるように三条ほど廻らせ、それぞれの線の間には向かって左上方を開放した三日月状の弧線を、横方向に連続して描く。下から二段面の弧線は、それぞれ下に黒丸を打つ。下半は一㎝前後の間を空けて縦線で区切り、区切った中には咲いた花を逆さまにしたような文様を描く。

内外面ともにロクロ目を残すが、外面は中央付近に入れた一条の縦ベラを境にし、左側を面取りしてロクロ目を消す。外面下端の屈曲部分には鋭い稜を付ける。その稜には下から押さえた部分があり、横から見ると、僅かではあるが上下の揺れが認められる。底部外面は外縁に浅い段を付けた後に中央へ向かって丸く膨らみ、そこには胴部から流れてきた白濁釉が掛かる。底部と胴部との境になる屈曲部分は、内面から丸く押さえられて深く入り、それに沿って横へ広がった亀裂が外面にまで及ぶ。厚みは、底部が七㎜、胴部が五㎜程度である。

咲いた花を逆さまにしたような、と説明した外面下半の文様だが、類似した文様を描いた茶碗が伝わる。根津美術館が所蔵する黒織部茶碗である（写真6）。ただし、当館の破片は黒釉を掛け外した部分に鉄絵で描くが、根津美術館所蔵品は黒釉を掛けた部分に線刻し、そこに透明釉を掛けて白抜きで表現する。白色と黒色の関係が反転する。見込みが深い筒形になる点も異なる。

根津美術館の黒織部茶碗は、上から見ると角を丸くした三角のような形になり、胴部にできた最も幅の広い平坦面ではなく、幅の狭い平坦面とその背面にあたる角状の部分に、黒釉を掛け外した窓を作る。正面にした三角形の窓には唐草状の文様を、背面の長方形の窓には籠目文と石畳文を描く。窓の上端はそれぞれ口縁部下の屈曲部までとなり、外へと開く口縁部から内面にかけて黒釉を重ね掛けする。胴部の黒釉部分には先に紹介した文様のほか、その反対面にも丸いものを二つずつ四列に分けて吊り下げたような文様を線刻し、窓や線刻部分だけではなく、全面に透明釉を掛ける。

丸や四角などを上から吊したような文様は他の織部茶碗にも見られ、「干し柿文」や「瓔珞文」などと呼ばれてきた。しかし、干し柿や瓔珞とする明確な根拠はない。植物、果実、鳴子、瓢箪などを吊した様子を描いたとされてきた志野や織部の文様を「吊し文」と一括し、近畿地方において「勧進縄」や「勧請吊」と呼ばれる吊し飾りとの類似を指摘する研究もある（荒川二〇〇七）。

おわりに

以上、収蔵品の整理と再調査を進める中で得た成果について報告してきた。作成したリストを基に編集した写真8は、展示への感想や希望を記入するアンケートを付けて、展示室で配付する予定である。備前焼の変遷を示した写真1は、展示補助資料として活用する。これらの資料は、よりわかりやすく、精度の高いものにするため、来館者の感想や意見を取り入れながら更新を続ける必要がある。

また、これまで展示する機会はそれほど多くなかった窯跡採集資料の中から、特徴が共通する伝世品が見つかった備前焼の徳利と美濃焼の黒織部茶碗を紹介した。この二つは、伝世品を焼成した窯と制作年代を検討する参考資料として活用できる。ともに一七世紀前半、いわゆる桃山時代の作品である。

写真7で示した徳利の変遷は、全体の形がわかる館蔵品を利用して作成した。変遷を考える際には、伊部南大窯跡とその周辺窯跡の発掘調査成果を参照した。提示した作品は、比較的大きな徳利が中心となったが、伝世品や発掘出土品を見ると、さらに多くの種類がある。なかでも、現在好まれる掌への収まりがよい小ぶりな徳利は、当館の所蔵品にはなく、紹介できていない。そのため、写真7は全体像を充分に網羅したものとはいえない。本来は小形品も含めた上で、胴部形状の系統別に変遷を示すべきところである。しかし、現状で知り得る作品を見る限り、口縁部のみに注目しても一定の傾向は捉えられていると考え、試案として示した。

《参考文献》

・荒川正明　「志野と織部――風流なるうつわ――」『志野と織部』出光美術館　二〇〇七年
・土岐市教育委員会・土岐市埋蔵文化財センター　『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』二〇〇二年
・乗岡実　「備前焼の徳利」『中近世陶磁器の考古学』雄山閣　二〇一七年
・備前市教育委員会　「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」『備前市埋蔵文化財調査報告』五　二〇〇三年
・備前市教育委員会　「国指定史跡伊部南大窯跡発掘調査報告書」『備前市埋蔵文化財調査報告』八　二〇〇八年

図１　備前市伊部と佐山周辺の窯跡分布図（S=1/40,000）

※ 岡山県教育委員会 『改訂　岡山県遺跡地図』第６・９分冊　岡山・東備地区　2003
に基づき作成。窯跡の番号と図２～６の時代表記は、この遺跡地図に従う。
ただし、発掘調査が行われた窯跡の時代は、発掘調査報告書を参考にした。

分布は佐山周辺の山裾付近と、地図外の南西地域（瀬戸内市長船町西須恵や瀬戸内市牛窓町長浜の寒風など）に広がる。
古墳時代末から飛鳥時代までの須恵器窯跡は、佐山よりも西須恵や長浜周辺に多い。佐山に窯跡が増えるのは奈良時代から。

図２　備前市伊部と佐山周辺の窯跡分布図　古墳時代末～奈良時代（S=1/40,000）

平安時代前半は佐山周辺とその南に分布の中心があるが、後半になると佐山の窯跡数は減少し、分布範囲は北へと広がる。
平安時代の終わり頃には、伊部周辺の山裾付近に窯を築く。時代が新しくなるにともない、分布の中心は北へと移る。

図 3　備前市伊部と佐山周辺の窯跡分布図　平安時代（S=1/40,000）

窯跡は佐山から大幅に減少し、伊部周辺の山中に増加する。谷筋に沿って山の奥に入った高い地点でも確認例が増える。
伊部地域の周辺以外には、ほとんど窯を築かなくなる。

図４　備前市伊部と佐山周辺の窯跡分布図　鎌倉時代（S=1/40,000）

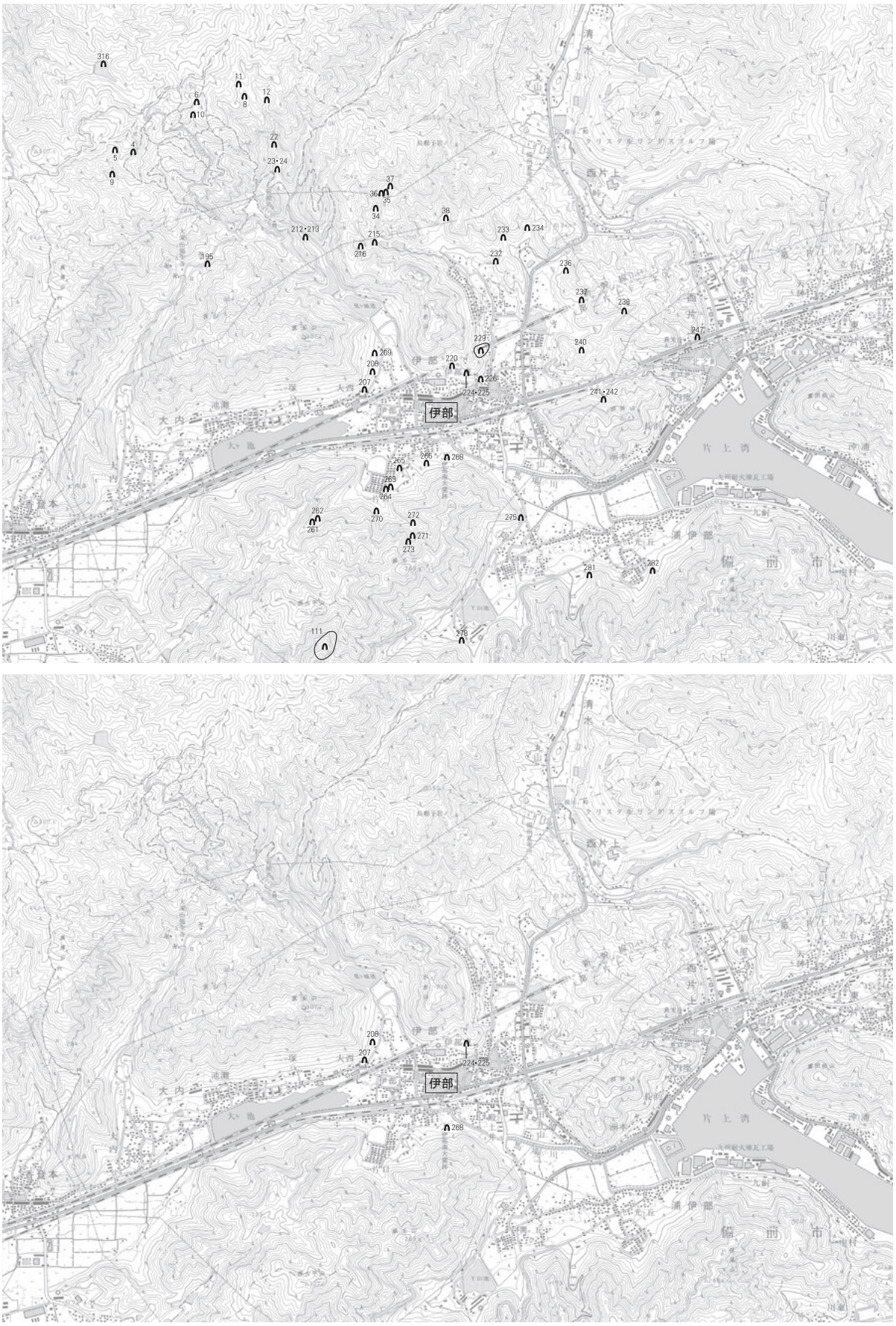
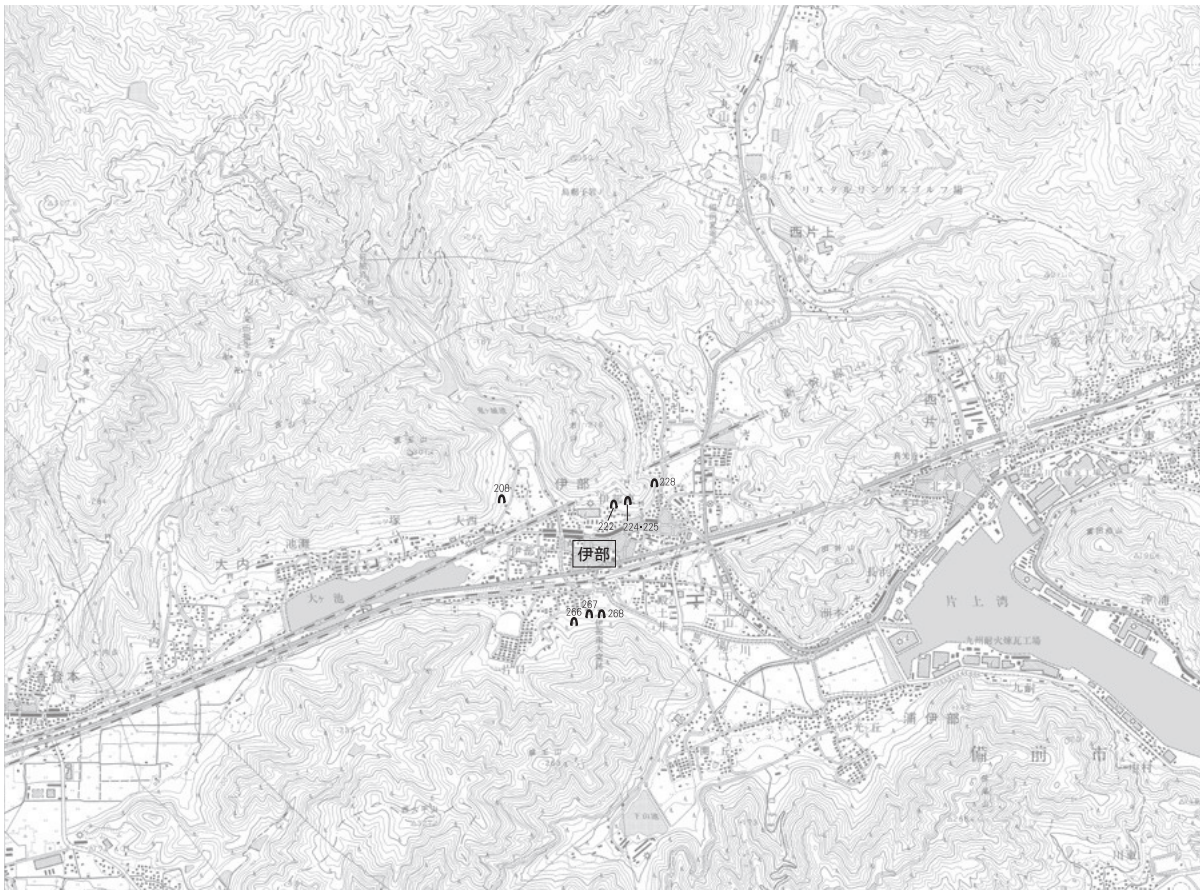


図 5　備前市伊部周辺の窯跡分布図　上：室町時代　下：安土・桃山時代（S=1/40,000）



室町時代から、伊部周辺の山裾付近に 20m を超える窯を築く。以後、窯の長大化が進む。
安土・桃山時代以降は、窯を築く位置が南大窯、北大窯、西大窯の 3 地点周辺に限られる。

図 6　備前市伊部周辺の窯跡分布図　江戸時代（S=1/40,000）

備前市伊部の南に広がる邑久窯跡群では、古墳時代後期から須恵器生産が始まる（木鍋山 1 号窯跡）。飛鳥時代から奈良時代までは、備前市佐山、瀬戸内市長船町西須恵、瀬戸内市邑久町長浜（寒風古窯跡群）一帯に須恵器の窯跡が分布するが、平安時代を通じて分布の中心は北へと移り、平安時代の終わり頃からは、伊部地域とその周辺において無釉のやきものを焼成する窯を継続的に築く。それは現代まで続く。

≪分布図作成のため、参考にした文献≫
・伊藤晃 「第十一章　窯業」『岡山県の考古学』 吉川弘文館　1987
・岡山県教育委員会 『山崎古窯跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 167　2002
・岡山県教育委員会 『改訂岡山県遺跡地図』第 6 分冊　岡山地区　2003
・岡山県教育委員会 『改訂岡山県遺跡地図』第 9 分冊　東備地区　2003
・岡山理科大学考古学研究室 『備前邑久窯跡群の研究』 2014
・岡山理科大学考古学研究室 『備前邑久窯跡群の研究 2』 2021
・備前市教育委員会 『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』備前市埋蔵文化財調査報告 5　2003
・備前市教育委員会 『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ』備前市埋蔵文化財調査報告 7　2006
・備前市教育委員会 『国指定史跡伊部南大窯跡発掘調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告 8　2008
・備前市教育委員会 『医王山東麓窯跡群発掘調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告 9　2012
・備前市教育委員会 『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告 11　2013
・備前市教育委員会 『医王山東麓窯跡群発掘調査報告書Ⅱ』備前市埋蔵文化財調査報告書 12　2017
・山本悦世 『寒風古窯址群―須恵器から備前焼の誕生へ―』吉備考古学ライブラリィ⑦　吉備人出版　2002